

Title	民族語に対するタンザニアの言語政策
Author(s)	米田, 信子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 1997, 7, p. 34-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71086
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

民族語に対するタンザニアの言語政策

米田 信子

1. はじめに

タンザニアは、アフリカ固有の言語であるスワヒリ語を国家語¹⁾として定め、その普及を促進してきた。現在タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透率は極めて高く、ケニアやウガンダといったスワヒリ語が使用されている近隣諸国と比べてもその浸透状況には大きな差が見られる。多言語国家の抱える最も困難な問題のひとつは、国家語や公用語の選択とその普及であると思われるが、この難問を克服したとされるタンザニアの言語政策は高く評価されることが多い。しかしながら、スワヒリ語の著しい浸透の陰に、衰退の過程に追いやられている130以上の民族語²⁾の存在があることもまた事実である。

2. タンザニアの民族語の現状

タンザニアの言語状況はダイグロシア³⁾、つまり、民族語とスワヒリ語の用途や使用領域は相補分布し、これらの言語は摩擦なく共存していると言われてきた (O'Barr 1971, Abdulaziz 1972, Heine 1976, Polomé 1980, Fasold 1984 他)。しかしながら、スワヒリ語の浸透に伴って用途の境界線は曖昧になり、この関係は次第に崩れてきている。筆者が民族語のひとつであるマテング語を対象にして1994年に行なった調査⁴⁾の結果から、タンザニアの民族語の現状について検討してみよう。

マテング語はバンツー諸語のひとつで、タンザニアの西南部に位置するンビンガ県で話されている。調査地は、ンビンガ県の中心地であるンビンガ・ンジニ (以下ンビンガ) と、村落部であるリテンボ・キジジ (以下リテンボ) である。ンビンガはンビンガ県の県庁所在地で、マテング人以外の民族も多数住んでいる。それに対してリテンボは歴史的にマテング人の拠点であると言われ (Ebner 1987)、現在も他地域から派遣されている行政役人以外の住民はほとんどがマテング人である。被験者は、ンビンガから45人、リテンボから50人のマテング人で、年配層 (50歳以上)、中年層 (30~49)、若年層 (20代半ば以下) の3グループに大別した。

2.1. 言語使用の現状

2.1.1. 家庭

表1は「あなたは家族と話すとき主にどの言語を用いますか」という質問に対する回答を、対話者の世代が年配層の場合、中年層の場合、若年層の場合に分けて、それぞれを被験者の世代と居住地別にまとめたものである。

〈表1〉 被験者の世代／地域別に分類した家族に対する使用言語 (%)

1a : 対話する家族が年配層の場合

	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	年配者			中年層			若年層		
				ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体
S	7	8	8	0	5	2	7	8	7	10	11	10
MS	45	37	41	78	40	59	43	50	47	18	22	20
M	48	55	51	22	55	38	50	42	46	72	67	70
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
	(45)	(50)	(95)	(9)	(10)	(19)	(11)	(11)	(22)	(25)	(29)	(54)

()は実数

Sはスワヒリ語、MSはスワヒリ語とマテンゴ語の両方、Mはマテンゴ語、を表わす。ただし、MSは、トピックの違いなど会話によってスワヒリ語とマテンゴ語をコード・スイッチさせるケースとひとつの会話の中でスワヒリ語とマテンゴ語をコード・スイッチさせるケースの両方を含む。

1b : 対話する家族が中年層の場合

	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	年配者			中年層			若年層		
				ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体
S	36	26	31	11	30	21	43	13	28	55	35	45
MS	55	64	60	78	60	69	53	78	66	32	54	43
M	9	10	9	11	21	10	4	9	6	13	11	12
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

1c : 対話する家族が若年層の場合

	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	年配者			中年層			若年層		
				ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体	ビ'ンガ'	リ'ンボ'	全体
S	59	36	48	44	20	32	73	50	61	59	36	48
MS	37	44	40	44	40	42	27	50	39	41	43	42
M	4	20	20	12	40	26	0	0	0	0	21	10
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表1 a～cを概観してみると、対話者が年配者の場合には半数がマテング語を用いると回答している。スワヒリ語を用いるという被験者は各地域、世代とも1割以下である。

しかしながら対話者が中年層や若年層になるとマテング語の使用は激減する。スワヒリ語とマテング語の両方を用いるという被験者もかなりいるが、スワヒリ語を主に用いるという割合とマテング語を主に用いるという割合は、テンボの年配層の被験者を除けば、対話者が年配層の場合とほぼ逆転している。このように、中年層や若年層のあいだでは、スワヒリ語がマテング語と同等、あるいはそれ以上に家庭内で用いられていることがわかる。

言語の使用状況には地域差が見られる。ンビンガに比べるとリテンボではマテング語がまだまだ用いられているようである。ただしこれはあくまでも使用言語がマテング語からスワヒリ語に移行していく速度の問題であって、移行の事実、あるいは移行の方向に変わりがあるわけではない。このことを裏付けるのが表2である。

<表2> 一世代前の家庭での使用言語 (%)

	ンビンガ	リテンボ	全体	年配者			中年層		
				ンビンガ	リテンボ	全体	ンビンガ	リテンボ	全体
S	5	0	2	10	0	5	0	0	0
MS	5	10	8	10	10	10	0	10	5
M	90	90	90	80	90	85	100	90	95
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表2は20～30年前に家庭で用いていた言語を年配層と中年層の被験者に回顧してもらった結果である。一世代前の家庭では、ンビンガ、リテンボ両地域とも圧倒的にマテング語が用いられている。この時代には家庭での言語使用に地域差は見られない。この時代の言語使用と現在の言語使用を比較すると、言語使用は両地域とも変化していることがわかる。したがって現在の言語使用に見られる地域差は、一方の地域の変化によるものではなく、両地域における変化の速度の違いによるものであると言えるだろう。

2.1.2. 民族コミュニティ

表3は「あなたは(世代別に)近隣のマテング人と話すとき主にどの言語を用いますか」という質問に対する回答である。この表から、民族コミュニティではマテング語が用いら

れる場面は家庭よりもさらに限られてきていることが見て取れる。とくにンビンガでは、マテング語を主要言語とする割合だけではなく、マテング語の使用全体が減少している。若者同士の会話になると、同じ民族であるにも関わらずマテング語はほとんど用いられていない。

〈表3〉被験者の世代/地域別に分類した近隣のマテング人に対する使用言語 (%)

3a : 対話者が年配層の場合

	ンビンガ	リソ	全体	年配者			中年層			若年層		
				ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体
S	15	9	12	10	10	10	18	10	14	16	7	11
MS	36	31	34	45	30	33	36	26	31	28	38	33
M	49	60	54	45	60	57	46	64	55	56	55	56
計	100 (45)	100 (50)	100 (95)	100 (9)	100 (10)	100 (19)	100 (11)	100 (11)	100 (22)	100 (25)	100 (29)	100 (54)

3b : 対話者が中年層の場合

	ンビンガ	リソ	全体	年配者			中年層			若年層		
				ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体
S	51	24	38	45	0	22	64	9	36	57	38	45
MS	30	60	45	33	80	58	36	91	64	24	41	33
M	19	16	17	22	20	20	0	0	0	24	21	22
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

3c : 対話者が若年層の場合

	ンビンガ	リソ	全体	年配者			中年層			若年層		
				ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体	ンビンガ	リソ	全体
S	78	24	50	56	10	32	64	18	45	92	31	59
MS	20	70	46	34	80	58	36	73	33	8	66	39
M	2	6	4	10	10	10	0	9	22	0	3	2
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

地域差は被験者と対話者の世代が若くなるにつれて大きくなるが、この地域差は家庭の場合に比べて民族コミュニティではいっそう大きくなる。これは、民族コミュニティの使用言語が、家庭の使用言語以上に速い速度でスワヒリ語に移行してきていることの現れであろう。

民族コミュニティでスワヒリ語が用いられるのは、日常の会話だけではなく、民族の文化伝統活動においても同じである。伝統行事⁹⁾での使用言語を調べるため、キホラとマトウーラというマテング人の伝統行事に参加した。キホラは、男性の太鼓に合わせて女性たちが歌いながら踊るといふ太鼓踊りで、6月から8月にかけて行われる。キホラの起源はマラウイ湖沿岸に住むニャサ人にあると言われているが、マテング人は自分たちの伝統行事として捉えている。歌の内容は農作業を励ます歌、収穫の喜びを表わす歌、亡くなった人に捧げる追悼の歌など多彩で、かつてはすべてマテング語で歌われていたそうである。筆者が参加したパフォーマンスでは、13のグループによって約50曲が歌われた。そのうち任意の25曲を録音したところ、スワヒリ語で歌われていたのが19曲、マテング語で歌われていたのが1曲、スワヒリ語とマテング語が混ざっていたものが5曲という結果であった。マトウーラはマテング人の婚礼行事のひとつで、花嫁の実家にお祝いに来た客人に酒と食事がふるまわれ、みんなで歌い踊るといふものである。参加したマトウーラでは、歌と踊りは一昼夜続いたが、ここでも歌われた歌の70%以上がスワヒリ語であった。

2.2. 言語運用能力

領域の縮小、使用の減少にともなって、民族語の運用能力も当然ながら影響を受けている。表4は、中年層と若年層のマテング語の運用能力について、それぞれひとつ上の世代からの評価をたずねた結果である。

世代別に見ていくと、中年層は、まずリテンボでは全員がマテング語を熟知している。ンビンガでは熟知している割合はリテンボとの間に大きな差があるが、「まあまあ」知っているものまで含めれば90%近くがマテング語を知っていることになる。それに対して若年層は、リテンボでは80%以上がマテング語を知っているものの、ンビンガでは半数がマテング語を「あまり知らない」という結果である。「あまり知らない」というのは、マテング語を理解はできるが話せない、という場合がほとんどであった。つまり、ンビンガですでに若者の半数がマテング語を話せなくなっているということである。子供のときにマテング語が家庭の使用言語であった中年層の場合とは異なり、若年層には、家庭の言語使用を見るかぎり、マテング語を日常的に使っていたことがまったくないという被験者も（とくにンビンガでは）少なくない。中年層の被験者がマテング語の使用の減少によってマテング語運用能力を低下させてきているのに対し、若年層には、マテング語を十分に習得していない場合も多いと思われる。

地域別に見ると、リテンボの人々のマテング語運用能力はンビンガの人々よりも全体的にかなり高いことがわかる。若年層でも家庭におけるマテング語使用がンビンガより多い分、マテング語も習得しているものと思われる。しかしながら、若年層のマテング語運用能力が低下しているという状況に変わりがあるわけではない。若年層のマテング語を「よく知っている」割合は、中年層の半分にも満たないのである。ンビンガに比べればゆっくりとした速度ではあるが、リテンボにおいても若者のマテング語運用能力は確実に低下してきていると言えよう。

＜表4＞ 地域／世代別に分類した中年層／若年層のマテング語の運用能力に対する一世代上からの評価（％）

	ンビンガ	リテンボ	中年層に対する評価			若年層に対する評価		
			ンビンガ	リテンボ	全体	ンビンガ	リテンボ	全体
よく知っている	48	72	66	100	83	30	45	38
まあまあ	21	19	22	0	11	20	37	28
あまり知らない	31	9	12	0	6	50	18	34
計	100	100	100	100	100	100	100	100

2.3. 民族語の危機

調査結果が示しているように、マテング語が優勢言語となるのは、家庭においても民族コミュニティにおいても、年配層が加わる会話のみである。ンビンガのマテング・コミュニティでは、マテング語が優勢でないというだけでなく、すでにスワヒリ語が優勢言語となっている。これは日常のコミュニケーションのみならず、最も使用言語が変化しにくいと考えられる民族の伝統行事においても同様である。

マテング・コミュニティでは、スワヒリ語と民族語は、もはやそれぞれの使用領域を相補分布させているという状況ではない。民族語の領域として「最後の砦」ともいえるこれらの領域においても、使用言語は中年層以下の世代を中心にマテング語からスワヒリ語に確実に移行してきていると言えるだろう。

マテング・コミュニティは、スワヒリ語が浸透しにくいと言われる条件⁶⁾を抱えており、タンザニアの他の民族に比べてスワヒリ語の浸透が特に進んでいるということはない。また、Brauner et al. (1978) の行った言語使用の調査によると、70%以上のマテング

人が家庭では民族語のみを用いると答えており、これはタンザニア全体の平均 60%を上回っている。つまり、これまで見てきたマテンゴ語に見られる状況は、タンザニアにおいて決して例外的なものではない。むしろ民族語を維持しているとされていたコミュニティでさえこのような状況にあるということから、これはタンザニアの大半の民族語が現在直面している状況であると推測される。このような民族語の状況の変化を Batibo(1992) の「民族語が言語取り替えにいたる段階」に照らし合わせてみよう。Batibo は、タンザニアの民族語の状況を言語取り替えに向けて次の 5 段階に分けている。

- 段階 1：民族語（L 1）のモノリンガル

純粋な民族語モノリンガルのスピーチコミュニティはタンザニアには存在しない。

- 段階 2：民族語が優勢なバイリンガル

民族語は家族や村、民族の活動などで用いられ、もうひとつの言語（L 2）はそれより広い範囲のコミュニケーションや特定のコミュニケーションに用いられる。

- 段階 3：L 2 が優勢なバイリンガル

L 1 を犠牲にして、もうひとつの言語の使用が拡大してくる。L 2 は、使用の拡大によって、支配言語となるだけでなく、話者にとってより安心して使用できる言語となる。多くのコード・スイッチ (Code Switching) やコード・ミックス (Code Mixing), L 2 からの広範な借用語が聞かれる。民族語の使用は、家族、民俗芸能などに限られてくる。

- 段階 4：L 1 の使用と運用能力が限られてくる段階

L 1 の使用は、伝統儀式や民俗芸能など、ごく限られた用途にしか用いられない。民族コミュニティでは本来の民族語の運用能力が失われつつあり、完全に習得されるための努力はされない。音韻や形態の単純化、不規則変化や統語的規則の一般化、語彙の混合などピジン化が見られるようになる。本来の民族語が話せるのは年配層に限られてくる。

- 段階 5：L 1 が L 2 の下層となる段階

L 2 の支配度が非常に高く、L 1 の言語取り替えが起きる。すなわち、L 1 は死滅している。しかしながら、L 1 の言語的特徴が L 2 の下地として残っている。

これはタンザニアの民族語の共時的な現象が段階に分けて述べられているのであるが、個々の民族語の変化の過程を表わすものとしても適用することができよう。Batibo はタンザニアの大部分の民族語が段階2にあると推測している。しかしながら先に示した調査結果をみると、多くの民族語がすでに段階3あるいはその先にすすんでいると考えられる。

多言語コミュニティにおいて、使用されている言語が維持されるのは、ダイグロシアである場合、言い換えれば、それぞれの言語の使用領域が競争や摩擦なく保持されている場合であると言われている (Fasold 1984, Mekacha 1993 他)。使用言語の境界線があいまいになり、使用領域が保持されなくなった言語は他の言語に取って代わられていくのが多言語コミュニティの一般的な現象である。領域を次第にスワヒリ語によって侵食されつつある現在のタンザニアの民族語は、領域の保持という言語維持の条件を備えていないということである。

3. タンザニアの言語政策

3.1. スワヒリ語に対する政策

タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透には、さまざまな要因がある。タンザニア全人口の約95%がスワヒリ語と同じバンツー諸語を母語としていること、それぞれの民族の人口が比較的少なく、人口比率の上で他を圧倒するような民族が極めて少ないことなど、スワヒリ語が浸透しやすいと考えられる民族構造をしている。またスワヒリ語が植民地時代以前から通商用リングフランカとして用いられていたこと、植民地政府やキリスト教宣教師の支配言語として用いられていたことなど、歴史的背景も大きく関与している。しかし、スワヒリ語が著しく浸透し始めたのが1960年代の終りから1970年代にかけてであるということ (Mekacha 1993) から考えると、独立以降徹底して行われてきたスワヒリ語普及の政策がなければ、現在のような状況はありえなかったと言えるだろう。

タンガニーカ⁹⁾は、ベルリン会議においてドイツの植民地支配下におかれ、第一次世界大戦でドイツが敗れてからはイギリス領東アフリカに組み込まれることになった。両国の植民地言語政策は異なっていたが、支配のためにスワヒリ語を必要とした点は共通していた。そのためスワヒリ語の標準化、正書法の確立、識字教育の基盤作りといったスワヒリ語の「整備」は、独立前から植民地政府によって行なわれてきていた。

支配言語としてすでに整えられていたスワヒリ語を、TANU (Tanganika Africa National Union, タンガニーカ・アフリカ人民族同盟, 現CCM: Chama cha Mapinduzi,

革命党)は独立に向かう国民国家としてタンガニーカを統一するための重要な手段として用いていく。スワヒリ語は、多民族社会におけるコミュニケーションの道具であると同時に「統一のシンボル」であった。「支配の言語」であったスワヒリ語は、「独立の言語」として用いられることになったのである。

独立をはたした1961年に、スワヒリ語は国家語として定められた。スワヒリ語はタンザニアにとって国民国家のナショナル・アイデンティティであり、その発展と普及は国家統一に不可欠なものであると考えられていた。スワヒリ語を「発展」させるために、スワヒリ語研究所や国語審議会といった組織が設立され、ダルエスサラーム大学にはスワヒリ語学科が設置された。これらの組織ではスワヒリ語の「整備」だけではなく、スワヒリ語教師の養成、テキストの編纂などにも力が注がれた。普及のために教育は極めて重要である。初等教育では、媒介言語をスワヒリ語に統一すると同時に教科としてもかなりの時間数をあてるカリキュラムが組まれた。また成人を対象にしたスワヒリ語の識字教育も始められた。1967年にはスワヒリ語は英語とともに公用語とされ、政府はそれぞれの言語の使用領域を明確にした。英語は高等教育と最高司法機関、スワヒリ語はそれ以外のあらゆる公的機関及び公的場面での使用言語として定められ、行政をはじめとする公的な場でのスワヒリ語の使用はさらに徹底された。

このようにスワヒリ語普及の政策は、スワヒリ語の整備充実、スワヒリ語使用の徹底、人々へのスワヒリ語習得の動機づけと、多方面から推し進められてきた。現在の状況は、これらの徹底した政策が、スワヒリ語が浸透しやすい基盤のもとに効果的に働いた結果であると言えよう。

3.2. 民族語に対する言語政策

タンザニアの言語政策の中心はスワヒリ語の推進と英語に対する対応であって、民族語に関してはほとんど注意が払われていない。民族語に対して公的になされている言及は、①民族語はスワヒリ語の語彙補充源である、②民族語は国の文化遺産である(Khamisi 1974)、という2点に限られる。

民族語に与えられている唯一の具体的な役割は「スワヒリ語の語彙補充源」である。これはスワヒリ語の語彙を補充するにあたってたてられた、「諸外国語から借用するよりもまず、可能な限り他のバンツー諸語から補充されるべきである」(Abdlaziz 1980)という方針である。国家語としてスワヒリ語の使用を拡大していくためには語彙の整備補充が必

要であった。その際、まずスワヒリ語の古語、あるいはスワヒリ語の他変種を見直すところから始めたが、他言語から語彙を借用する場合、その借用源となる言語の優先順位は、1：他のバンツー諸語（すなわち民族語）、2：アラビア語、3：英語、と定められた。この方針のもとに、独立以降数年の間にかかなりの語彙が民族語からスワヒリ語に新しく加えられている（Abdlaziz 1980）。

しかしながら、スワヒリ語の語彙の補充源という役割は長期的ではない。確かに現在も学術用語を中心にスワヒリ語の語彙は補充される必要があり、その補充源に対する国語審議会の方針は上に示したものとほぼ同じである（Mwansoko 1989）。しかし現在スワヒリ語が必要としているのは、西洋諸国で発達してきた学問の専門用語や、諸外国語で表わされている「近代的な」概念を表わす用語であって、そのような用語を民族語から補充するというのは現実的ではなく、実際にはほとんど英語から借用されている。

「国の文化遺産」という位置付けについてはどうか。この位置付けを見る限り、政府は民族語の存在を肯定的に捉えてるように見える。しかし民族語が使用されるべき領域や場面が示されていない上、具体的に民族語を「国の文化遺産」として保護あるいは継承していくという政策もまったくたてられていない。それどころか1984年に当時の大統領ニエレレは、「最終的に民族語が消失してしまうことがスワヒリ語の進展による影響のひとつであったとしても、それは遺憾なことではなく当然の展開である」と演説のなかで述べている（Batibo 1992）。

民族語に象徴される各民族独自の文化伝統は、タンザニアの国家としての財産でもある。その伝統こそが確固たるナショナル・アイデンティティを形成するのであるが、一方で、民族意識が強調されてしまえば、「部族主義」を呼び起こし、国家統一が妨げられることになりかねないという心配もある。このジレンマは民族語の使用に対して政府に不明確な態度をとらせている大きな要因であろう。

1990年代に入って新しく提案された言語政策においても、民族語に対する認識は独立当時のものとほとんど変わらず、政府の態度は相変わらず明らかにはされていない。

3.3. スワヒリ語浸透による民族語と英語への影響

スワヒリ語の浸透は、タンザニアの言語状況を多方面から変化させてきた。英語にも民族語にもその影響は現れている。ここで注目したいのは、その現れ方の違いである。

スワヒリ語の浸透が英語に及ぼした一番の影響は、その運用能力の低下である。本論文

の範疇からはずれるため、タンザニアの英語の現状については詳しく述べないが、スワヒリ語が英語に代わって公的な社会的役割を担うようになったことで、英語は一般の人々の生活からはまったく遠ざかってしまっている。中学校以上の高等教育では媒介言語として英語が用いられているが、中学校への進学率はまだまだ低い上、英語を媒介言語とすることで導きだされたのは、「英語運用能力の向上」ではなく、英語運用能力の不足に起因する「学力の低下」であった。

それに対し、民族語に及ぼした最も大きな影響は使用領域の縮小である。民族語にはもはや独占領域はない。外国語である英語と母語である民族語では、運用能力の低下の程度に当然差がでてくるであろう。しかし、民族語の領域がスワヒリ語によって侵食されている一方で、著しい運用能力の低下にも関わらず、英語の領域が保持されているのは言語政策の結果に他ならない。既述のように、英語の領域は政策によって確保されており、その領域が維持されることは政策のめざすところである。高等教育の媒介言語をスワヒリ語に移行する案が1969年以来たびたび出されてきたが (Rugemalira et al. 1989) , 実現の見込みがないこともその一例であろう。

3.4. 言語政策に対する人々の意識

以上述べてきたように、タンザニアの民族語は、その維持を考えるならば決して楽観視できない状況にある。それではこのような状況を人々はどのように捉えているのだろうか。

ある言語が支配的になるのは、その話者グループが支配的になった結果である場合が多い。支配の一貫として支配者側の言語が被支配者側に強要される場合である。植民地や少数民族民族に対して現在も世界のあらゆるところで行われているこのような言語の強要は、まさしく民族アイデンティティを侵し、その民族の文化を侵略するものである。けれどもタンザニアにおけるスワヒリ語の場合、スワヒリ語話者グループが他民族を支配しているのではなく、人々にとってスワヒリ語は民族的に中立的であると考えられている。独立期まで内陸部には「スワヒリ語は沿岸文化のプロパガンダである」というスワヒリ語に対する否定的イメージもあったが、スワヒリ語の使用が増すことでスワヒリ語の文化的側面より機能的側面が重視されるようになり、それも次第に薄らいできた。このためスワヒリ語の浸透に対して、強要、侵略といったイメージは希薄である。それどころか130を超える多民族からなるタンザニアが民族紛争を起こさないのはスワヒリ語という共通の言語をもっているからである、という意見は政府関係者からだけでなく一般の人々からも頻繁に聞

かれた。現在アフリカで起きている紛争を見ると、言語が違うことが必ずしも紛争の原因には関係していないことがわかるが、独立期に政府によって示された「スワヒリ語による国家の統一」という信仰は広く行きわたっている。

このように、言語政策や現在の言語状況に対する際だった反発は現在のところ見られない。タンザニアの言語政策がもっとも評価されるべき点は、人々にこのような意識を持たせることができたということであろう。民族語に対してスワヒリ語の語彙補充源という役割と国の文化遺産という「地位」を与えること、また公的にその使用を禁止することはしなかったこと⁹⁾は、スワヒリ語の勢力拡大に対する国民の否定的な感情を最小限にとどめたと思われる。

しかしながら、民族語使用の縮小や運用能力の低下がさらに進み、民族語維持の問題が深刻化してきたとき、人々はスワヒリ語の勢力拡大にどこまで寛大でいられるであろうか。

4. 民族語復興の可能性

スワヒリ語に対する意識には民族によって差が見られるが、自分たちの生活にスワヒリ語が不可欠であるという考えは共通している。比較的スワヒリ語に対して批判的である人々であっても、国中に普及しているスワヒリ語の便利さを受け入れいる。しかし、同時に、スワヒリ語に対する意識に関わらず、自分たちの民族語が死滅してしまうことは許されないという考えも共通している。自分たちの生活言語として民族語がスワヒリ語に取って代わられることを問題としない人々であっても、民族語はまもるべき自分たちの文化遺産であるという意識は強く、ニエレレが言うように、自分たちの民族語が死滅してしまうことをスワヒリ語の進展の当然の展開であるとは考えてはいない。

タンザニアの民族語は言語維持の条件を失ってきてはいるものの、年配者や村落部の人々が民族語を話せる現在はまだ、民族語存続の危機を一般の人々が具体的に意識する段階には至ってはならず、スワヒリ語の浸透に対して感情的に安定した状態であると言えるだろう。しかし、人々の意識が今後の民族語の状況によって変わっていくことは十分に考えられる。マテンゴ・コミュニティで行なった民族語に対する若者の意識調査の結果では、「マテンゴ語を話さない」ということを自らが選択できるのではなく、能力的、あるいはコミュニティを離れているなど環境的に「マテンゴ語が話せない」という状況に置かれている被験者ほどマテンゴ語を自分たち民族のアイデンティティとして重要視する傾向が見られた。これはそのことを暗示する興味深い結果である。

国家統一や国家のアイデンティティが熱く叫ばれるとき、個々の民族のアイデンティティを無視した同化政策がとられること、そしてその政策の中心に言語の同化政策が置かれることは、これまでもあらゆるところで見られてきた。一方、その同化圧力から民族が再認識されること、そしてその圧力に対する反動として起こる民族アイデンティティ復興の動きもまた、世界的に見られる傾向である。

タンザニアにおいても、民族語を見直す動きがおこる可能性を裏付けるように、スワヒリ語の浸透がもたらした民族語の状況を懸念する声や、民族語の維持政策の必要性を説く声が、少しずつではあるが、各地で聞かれはじめている。

5. おわりに

これまで政府は、民族語の使用について禁止することも奨励することもしないというあいまいな態度をとりつづけてきたが、これは結果的には民族語の維持を支持しないという政策をたてたのと同じ状況を導きだしたことになる。そしてこれは人々の感情とは逆行するものである。言語取り替えの過程にある民族語を、あくまでも「国の文化遺産」と捉え、その維持を目指すのであれば、保護していく何らかの手が打たれなければならぬ。あるいは政府にその意思がないのであれば、今後考えられる民族語見直しの動きにどのように対応していくのが新たな問題になるだろう。

国家語の普及に全力を注いできたタンザニアの政府にとって、民族語の現状をどのように捉え、対処していくかが、次の大きな課題であろう。

注

1) スワヒリ語では *lugha ya taifa* である。スワヒリ語の *taifa* は「国家」という政治的単位である「国」を表わす語で、領域や土地といった意味での「国」を表わす *nchi* とは区別されて用いられる。*taifa* の表わす概念を明らかにするために、本論文では「国家語」という訳語で表わす。

2) アフリカの民族集団に対して「部族」、その集団のことばに対して「部族語」という語が用いられることが多い。しかしながら、これらの用語は「未開」という差別的イメージをもつものであり、そのような差別的な概念を看過するのは筆者の本意ではない。本論文ではこれらを「民族」「民族語」と呼ぶことにする。

3) ダイグロシアについては多様な定義がなされているが、「役割の相補分布」という点は「ダイグロシアの神髄」として一致するところである。そこで本論文では、ダイグロシアを「多言語コミュニティにおいてそれぞれの言語の役割が相補分布し、それぞれの領域が安定している状態」と定義する。

4) この調査は、Tanzania National Scientific Research Council (UTAFITI) の許可のもとに、文部省科学研究費補助金国際学術研究「アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査（研究代表者：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、日野舜也教授）」の一部として行なった。お世話になった方々に心から感謝の意を表わしたい。この調査についての詳しい報告は、方法論や背景などを含めて、米田（1994）でなされているので、本論文ではそのデータのみを引用する。

5) 人々の間で「伝統行事」と認識されているのは、「自分たち独自のもの」あるいは「自分たちに起源がある」と考えられている行事であって、必ずしも長い歴史を持っているわけではない。

6) スワヒリ語が浸透しやすい条件として1) 沿岸部、2) イスラム圏、3) 都市部、4) バンツー系民族、があげられる。（Heine 1976、Polomé 1980、Barton 1980 など）ンビンガ県は内陸部に位置し、マテンゴ人はキリスト教徒がほとんどである。また1988年の国勢調査では、ンビンガ県には「urban」と分類された地域はなかった。都市化が最も進

んでいる県庁所在地のンビンガが「semi-urban」と分類されている他はすべて「rural」と分類されている。

7) この調査はひとつの民族を対象としているのではなく、45の異なる民族を対象に行われた言語使用に関する調査である。それぞれの民族の本拠地で調査が行われたのではないので、各民族の被験者について、人数が少ない上に「それぞれの民族コミュニティを離れて高等教育を受けているエリート」に限定されているという問題点は残るが、民族別の言語使用が報告されている貴重なデータである。

8) タンザニアは、1964年に大陸部のタンガニーカと島嶼部のザンジバルが合邦してタンザニア連合共和国となった。ザンジバルでは元来スワヒリ語が話されていたので、本論文の焦点は大陸部タンガニーカである。

9) 政府としてはあくまでもスワヒリ語の使用領域を定めたにすぎず、民族語の使用を禁止したわけではないだろうが、実際にはスワヒリ語の使用を徹底させるために、民族語を使用した者に体罰を加えるなどの「スワヒリ語強要」が行われていた小学校も少なからずあったようである。

参考文献

- Abdulaziz, M. H. 1972. "Triglossia and Swahili-English Bilingualism." *Language in Society* 1, 197-213.
- , 1980. "The Ecology of Tanzania National Language policy." in Edgar C. Polomé and C P. Hill (eds.), 139-175.
- Batibo, Herman. 1992. "The Fate of Ethnic Languages in Tanzania." in Matthias Brenzinger (ed.), 85-98.
- Brauner, S., C. Kapinga and K. Legère. 1978. "Kiswahili and Local Languages in Tanzania : A Sociolinguistic Studies." *Kiswahili* 48, 2,48-72.
- Brenzinger, Matthias (ed.) 1992. *Language Death: Factual and Theoretical Explorations with Special Reference to East Africa*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Bureau of Statistics, Ministry of Finance, Economic Affairs and Planning. 1988. *Populations Census : Preliminary Report*, Dar es Salaam.
- Ebner, Elzear P. 1987. *The History of the Wangoni*. Peramiho: Benedictine Publications.
- Fasold, Ralph. 1984. *The Sociolinguistics of Society*, Oxford: Blackwell.
- Ferguson, Charles A. 1959. "Diglossia." *Word* 15, 325-349.
- Fishman, Joshua A. 1972. *The Sociology of Language* Massachusetts: Newbury House Publisher.
- Heine, Bernd. 1976. "Knowledge and Use of Second Language in Musoma Region." *Kiswahili* 46, 1, 49-59.
- Khamisi, Abdu M. 1974. "Swahili as a National Language." *Ujamaa*. Gabriel Ruhumbika (ed.), Dar es Salaam: East Africa Literature Bureau.
- Legère, Krsten. 1992. "Language Shift in Tanzania." in Matthias Brenzeinger (ed.), 99-115.
- Mekacha, Rugatiri D. K. 1993. *The Sociolinguistic Impact of Kiswahili on Ethnic Community Languages in Tanzania : A Case Study of Ekinata*, Bayreuth: Bayreuth University Press.

- Mwansoko, H. J. M. 1989. "Swahili Terminological Modernisation in the Light of Present Language Policy in Tanzania." *Language in Education in Africa : Tanzania Perspective* C. M. Rubagumya (ed.) , Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- O'Barr, William M. 1971. "Multilingualism in a Rural Tanzania Village." *Anthropological Linguistics* 13, 289-300.
- Ofisi ya Mkuu wa Wilaya ya Mbinga. 1994. *Takwimu Muhimu za Uchumi na Maendeleo : Wilayani Hadi Juni 1993*, Mbinga.
- Polomé, Edgar C. 1980 "Tanzania : A Socio-linguistic Perspective." in Edgar C. Polomé and C. P. Hill (eds.), 103-138.
- Polomé, Edgar C. and C. P. Hill (eds.) 1980. *Language in Tanzania*. Oxford: Oxford University Press.
- Rubagumya, C. M. (ed.) 1989. *Language in Education in Africa : Tanzanian Perspective*. Clevedon : Multilingual Matters Ltd.
- Rugemalira, J. M., C. M. Rubagumya, M. K. Kapinga, A. F. Lwaitama and J. G. Tetlow. 1989. "Reflections on Recent Developments in Language Policy in Tanzania." In C.M Rubagumya (ed.), 25-35.
- 米田 信子 1995. 「タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透と民族語：マテンゴ語の例をとおして」神戸市外国語大学大学院外国語研究科に提出した未刊の修士論文
- Yoneda, Nobuko 1996. "The Impact of the Defusion of Kiswahili on ethnic Languages in Tanzania : A Case Study of Samatengo" in *African Urban Studies* IV, 29-73, Institute for Study of Languages and cultures of Asia and Africa, Tokyo..